

## シンポジウム

### 認知言語学からみた関連性理論の問題点

中村 芳久

#### 0. はじめに

本論では第1節で、関連性理論の別称である Cognitive Pragmatics (認知語用論) の cognitive と Cognitive Linguistics (認知言語学、以後 CL) の cognitive の差異を明確にし、第2節で、関連性理論 (以後 RT) の概念や分析法の問題点を4点指摘する。問題点の指摘と同時に、CLからの解法や解法の方向性を示す。問題点は、LFと明意、scalar implicature、暗意の推論、法助動詞の分析、に関するものである。

#### 1. RTとCLの「認知」

RTを認知語用論 (cognitive pragmatics) と呼ぶときの認知(cognitive)とはなにか。まず、Marmaridou (2000:1-2) は、(1)にあるように、Austin, Searle, Griceに始まる哲学的語用論から、4タイプの語用論が展開したとしており、その1つに②cognitive pragmaticsが位置付けられている。

- (1) philosophical pragmatics (see Austin 1962, Searle 1969, Grice 1975)
  - ① radical and neo-Gricean pragmatics (see Cole 1981)
  - ② cognitive pragmatics (see Sperber and Wilson 1986/1995, Blakemore 1987)
  - ③ interactive pragmatics (see Thomas 1995)
  - ④ societal pragmatics (see Mey 1993)

認知語用論の主たる関心は、引用(2)の最初の下線部にあるように、コミュニケーションにおける情報の心的処理ということ、これはつまり、(3)にあるように、含意算定の際の推論ということである。RTあるいは認知語用論でいう「含意算定のための推論」は、後に「暗意」の算定でみるように、論理操作系である。

- (2) Cognitive pragmatics focuses on the mental processing of information for communicative purposes and is explicitly restricted to an isolated aspect of cognition considered responsible for pragmatic phenomena. In this approach, the linguistic medium is simply a constraining factor in achieving communicative goals. Incidentally, this is in line with corresponding developments in formal syntax, in which the specification of rules has given way to the placement of constraints

on the form of the sentences of a language.

(Marmaridou 2000:1-2)

- (3) ...cognitive pragmatics is a development of Grice's view on the role of human reasoning in generating implicature.  
(Marmaridou 2000: 224)

付言しておくこと、引用(2)の後の下線部に、「語用論的現象に限定された、独立した側面 (isolated aspect)」ということがあるが、これは、語用論的推論能力が他の統語論や意味論などの領域から独立して「自律的」であることを示唆している。また、それに続く部分にあるように、RTでは、言語は、含意を絞り込む、あるいは「制約的に」働くという観点であるが、これはいわゆる生成文法の規則が制約的であるという観点と軌を一にしている。

一方、CLの関心は、下の(4a)にあるように、言語現象や文法現象がより一般的な認知能力とどのように連動しているかということであり、認知言語学の「認知」とは、言語に限定されない「より一般的な認知能力」のことである。

(4b)にあるように、CLとりわけ認知文法における分析は、以下の①～③を満たすような論拠を追究する。まず、①用いられる理論的概念(例えば、「プロファイル・認知ベース」「トラジェクター・ランドマークの配置」「直接の意味スコープ」「探索域」など)は、他の領域(例えば心理学)で独立に観察される認知能力と直結している。②これらの概念は、言語間で平行的に見られる現象の意味記述に不可欠であり、③さまざまな文法現象の説明に決定的である。

- (4) a. Cognitive linguistics is concerned with how the details of grammar are tied to more general cognitive capacities.  
(Tomlin 1997)
- b. A primary working strategy...has been to seek converging evidence from three different sources. First, particular descriptive constructs (e.g. profiling, trajector/landmark alignment, immediate scope, search domain) are shown to be necessary for adequate semantic description of multiple phenomena in various languages. Second, it is argued that these constructs are commensurate with (if not identical to) independently observable cognitive abilities. Third, it is demonstrated that the same constructs are critical for the explicit characterization of varied grammatical phenomena.  
(Langacker 1999: 26-7)

次の引用ではさらに、他の一般的な認知能力や認知的概念がどのような言語現象や言語活動(さらには思考や行動そのもの)と連動しているかがまとめられている。

- (5) ① Figure-ground and view point organization pervades the sentence (Talmy 1978, Langacker 1987/1991), the Tense system (Cutrer 1994), Narrative structure (Sanders and Redeker 1996), in signed and spoken languages, and of course many aspects of non-linguistic cognition. ②

Metaphor builds up meaning all the way from the most basic levels to the most sophisticated and creative ones (Lakoff and Turner 1989, Grady 1997). ③ And the same goes for metonymic pragmatic (or reference point) functions (Numberg 1987) and mental space connections (Sweetser and Fauconnier 1996, Van Hoek 1996, Liddell 1996), which are governed by the same general Access principle. ④ Frames, schemas and prototypes account for word level and sentence level syntactic/semantic properties in cognitive and construction grammar (Lakoff 1987, Fillmore 1985, Goldberg 1997, Langacker 1987/91), and of course they guide thought and action more generally (Bateson 1972, Goffman 1974). ⑤ Conceptual blending and analogy play a key role in syntax and morphology (Mandelbit 1997), in word and sentence level semantics (Sweetser 1999), and at higher levels of reasoning and rhetoric (Tobert 1998, Coulson 1997, Turner 1996). ⑥ Similarly, we find force dynamics and fictive motion (Talmy 1985, 1996) operating at all levels (single words, entire systems, like the modal, and general framing).

(Fauconnier 1999: 100-1)

ところで認知語用論の「認知」は、含意を算出する際の推論であったが、その際の推論の能力（三段論法など）が、より一般的な認知能力に由来するとなると、認知語用論（すなわち RT）は、CLに吸収され、その存在意義を失うことになる。さらに理論的には、含意算定の推論がより一般的な認知能力によるということになると、語用論という領域は、一般的認知能力を反映する他の領域（意味論や文法）とも連続的であり、領域としての自律性を失うことになる。本論ではこの点は追究しないが、数学的推論までが一般的認知能力に由来するというようなことになる（cf. Lakoff & Johnson 1999: Ch 21）、そのような可能性は十分あると予想される。

（CLの立場は、言語能力と一般的認知能力が連続的であるという立場であるが、言語能力が一般的認知能力とまったく同質というのではなく、一般的認知能力の「特化したもの」という捉え方もある（Langacker, p.c.）。イディオ・サバンに基く言語能力自律説に対しては、正高（2002）が参考になる。）

## 2. RTの問題点とCLによる解法

本節では、RTの理論的概念の問題点を具体的に指摘しながら、それらが、CLの一般的認知能力に由来する理論的概念・認知プロセスによって自然な説明が与えられることを示す。

### 2.1. LFと明意の問題点：「認知ベース上のプロファイル部」による解法

論理形式LFがわかりにくい概念であることは、他でも指摘されていることであるが、LFは、(6a)からも覗える通り、それをインプットとして推論 (inference) を通して明意 (explicature) を

得るのであるが、そのインプットである LF が具体的に、どの程度の、どのような性質の意味内容を有するのか、(6b)からも明らかにならない。インプットの情報の質と量が不明であれば、どのように推論 (reasoning, inference) が働き、どのような明意 (や暗意) に到達するかも、解明できないはずである。

- (6) a. Explicature: an ostensibly communicated assumption which is inferentially developed from the incomplete conceptual representation (logical form) resulting from linguistic decoding.

(Glossary in Carston and Uchida (eds.) 1998)

- b. 論理形式 LF: 「U によって符号化されている論理形式」とは話し手が文字通り口から出した文、つまり...「解読的意味」(言語形式を「解読」しさえすれば得られるもの、p. 5) を持つ単語のつながり...」 (今井 2001: 52, Sperber and Wilson 1995:182)

例えば、(7)(a)(b)の「ボクはウナギだ」や *I'm Modern English* の LF はいかなるものであろうか。

- (7) a. ボクはウナギだ。
- b. ...he's Old English.... I'm Modern English. (Lodge, D. *Small World*, p. 10, Penguin)

おそらく RT から明解な解答は得られないだろう。いわゆる語や句、あるいは節レベルの意味がどのような構造をしているのかについて十分な取り組みがなされていないためと思われる。CL は、意味が基本的に「認知ベース上のプロファイル部」という構造で与えられることを明らかにしており、この種の問題は生じない。例えば、*I teach Modern English* などで共通の認知ベースを持ち、その主語参与体 (I) と目的語参与体 (Modern English) とをプロファイル部とする、ということが出来る。つまり、*I teach Modern English* と *I'm Modern English* は共通の認知ベースを持ち、プロファイル部のみを異にするというわけである。

- (8) a. *I teach Modern English* の認知構造



- b. *I'm Modern English* の認知構造



- b'.



(これらの図で、細線は認知ベースを、太線はプロファイル部を表す)

この場合の共通の認知ベースとして、動作主 (I) が抽象的な移動体 (Modern English) を受け手 (学生など) に向けて送り出すというような構造を指定してみよう。そうすると(8a)では、動作主 (左端の円) とその働きかけ (二重線矢印)、それに移動体 (小円) がプロファイルされる。それに対して、(8b)では、I と Modern English のみがプロファイルされる。(より正確には、両者の間に何らかの関係があるということを示す *be* で連結されているから、(8b')のように、「関係」を表す破線で、I と Modern English が繋がっている。)

この現象は少し細かく見ると次のようである。すなわち *I'm Modern English* の明意は I と Modern English の何らかの関係であり、それがさらにより具体的な認知ベース上に重ねられると、その具体的な認知ベース全体が暗意である。暗意としての認知ベースは、プロファイル部に対して直接の認知ベースではなく、より間接的な認知ベースになっている。そしてどのような間接的な認知ベース上に重ねるかが、RT という含意探索の過程である。

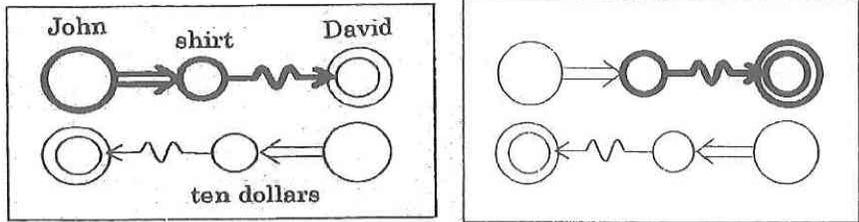
LF はプロファイル部と、明意は直接の認知ベースに対応しているが、プロファイル部と認知ベースが表裏となって意味が成立するのに、それを分解して LF と明意という別々の意味レベルを想定しているところに問題があると言える。

LF と明意、あるいはプロファイル部と認知ベースとが表裏となって、いわゆる意味を形成することは、以下の例によって明確に示すことができる。売買の場面を認知ベースとして、それに関与する参与体 (売り手、買い手、商品、代金など) のうち、どの参与体をプロファイルさせるか (さらには、どの参与体を主語や目的語で表現するか) によって、以下のような表現のヴァリエーションが生まれる。この場合、いわゆる動詞の意味の異なりは、どの参与体をプロファイルするか (つまりプロファイル部) の違いなのである。

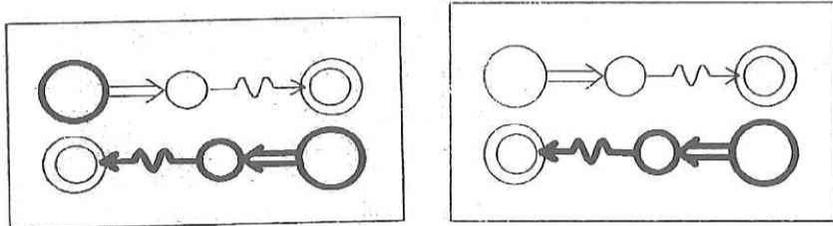
- (9) a. John sold an old shirt to David for ten dollars.  
 b. David bought an old shirt from John for ten dollars.  
 c. John charged David ten dollars for an old shirt.  
 d. David paid ten dollars to John for an old shirt.  
 e. The old shirt cost David ten dollars.

これらの例では、認知ベースは同一でプロファイル部がそれぞれ異なっているが、(9)a, b, c, d のプロファイル部 (太線で表示) の違いは、概略(10)のように図示される。各文の認知構造には 2つの行為連鎖が含まれており、上段の行為連鎖は主に、売り手から買い手への商品の移動を、下段の行為連鎖は、買い手から売り手への代金の移動を表している。

- (10) a. John sold an old shirt to David.      b. David bought an old shirt from John.



- c. John charged David ten dollars.      d. David paid ten dollars to John.



(9a)~(9e)の違いを、LFの違いだとRTが主張するのであれば、(9a)~(9e)の主な異なりはプロファイル部の異なりでしかないので、LFは多分にプロファイル部と対応しているということになる。そうであれば、プロファイル部は認知ベースなしでは（つまり、単独では）存在し得ないので、プロファイル部に対応するLFも、単独では存在し得ない理論的概念、ということになる。LFを生かすのであれば、認知ベースに類する概念をRTに導入するということになるが、しかしどうしても、LFとそれを生かすために導入された概念は、前景と背景というような、認知のあり様を反映する概念であるということである。つまりそういう形でLFという名称が維持されても、それは認知的に規定された概念であり、認知を基盤とする概念だということである。

「認知ベース上のプロファイル部」（profile imposed on a base）という意味の捉え方は、いわゆるレトリカルな表現についても、その意味解明に興味深い分析を示唆してくれる。通常の言語表現が、主にプロファイル部を問題にするのに対して、レトリカルな表現は一般に、認知ベースの方を問題にする。

例えば(10a)の「勝ち」は勝ち」「負け」は負け」のような表現は、「あの勝ちほんとうは負けだったのだ」のように、勝ちを負けに近づけ、あわよくば負けにすり替えてしまおうとする相手に対して、用いられることがある。この場合の「勝ち」は、「勝ち」と「負け」の2つのカテゴリーを連続的に捉えている相手に対して、2つのカテゴリーが異なる非連続的なカテゴリーであることを提示し、そこから「勝ちに属する勝ち」はみな同じでしょう」ということを伝える。「勝ち・負け」をいずれのカテゴリー観で捉えるかは、認知ベースや認知ドメインの問題であり、連続的なカテゴリー観に対して非連続的なカテゴリー観を提示する「AはA」、A is A.

のようなトートロジー表現は一般に、(プロフィール部ではなく) 認知ベースを問題にしている  
 ということができる。

- (10) a. 「勝ち」は「勝ち」「負け」は「負け」                      a'. Murder is murder.      (中村 2000)  
 b. Mary's not stingy – she's thrifty.                                      (Marmaridou 2000: 143-9)

また(10b)のようなメタ言語的否定も、認知ベースの問題として捉えることができる。例えば「お  
 金を使わない」というプロフィール部は同じでも、そのことが「良いこと」「悪いこと」のどち  
 らのドメイン上に置かれるかによって、stingy と thrifty の選択が決まる。(10b)のメタ言語的否  
 定は、「彼がお金を使わない」というプロフィール部の置かれている認知ドメインが「悪いこと」  
 ではないことを表しており、一般にメタ言語的否定は、意味的なプロフィール部ではなく、そ  
 れを支える認知ドメイン (の1つ) を不適として退けると言ってもよい。

レトリックの多くが、意味にとって不可欠な認知ベースや認知ドメインを問題にするのであ  
 るが、これを考慮していない RT の明意や暗意によって、レトリカルな表現の本質的解明がどの  
 程度進むのか疑問として残る。(LF に代えて表意命題・明意・暗意のような three levels の意味  
 区別を導入しても、指摘した問題は問題として残り、ここで示した解法は、その場合も有効で  
 ありたいと思われる。)

## 2.2. scalar implicature の扱いの問題点：instantiation による解法

次の(11a)は(11b)を entail し、(12a)も(12b)を entail する。それではなぜ、(11)の方は(a)の代りに  
 (b)を用いることができ、(12)の方は(a)の代りに(b)を用いることができないのだろうか。あるい  
 は、なぜ(12b)は、(12a)の否定「太郎が食べたのは4個ではない」を含意し (scalar implicature)、  
 (11b)は、(11a)の否定「教室に入って来たのはブルドックではない」を含意しないのだろうか。  
 scale を entailment で定義するなら (e.g. Levinson 1983: 133)、ブルドッグと犬も、4個と3個も  
 いずれも scale を成す。

- (11) a. 教室にブルドックが入ってきた。                      b. 教室に犬が入ってきた。  
 c. (11a) entails (11b)  
 (12) a. 太郎はケーキを4個食べた。                              b. 太郎はケーキを3個食べた。  
 c. (12a) entails (12b)

新グライス派の Horn(1984)の解法は、(13)のような Q-principle と R-principle の使い分けによる。

- (13) Q/R-principles (Horn 1984)  
 Q-principle (Hearer-based): Make your contribution sufficient; say as much as you can.

(Given both Quality and R)

R-principle (Speaker-based): Make your contribution necessary; say no more than you must.

(Given Q)

つまり、(11)の場合は R-principle による発話であり、(12)の場合は Q-principle に基く発話であるため、というのであるが、なぜ(11)の場合 R-principle に従い、(12)の場合 Q-principle に従うのが、不明である。

ここでは、CL (とりわけ認知文法) の instantiation (例示) という概念が有効である。「ブルドッグ」は「犬」の具体例 (instance) として捉えられるから、ブルドッグと犬は instantiation の関係にある。しかし、4個は3個の具体例ではなく、4個と3個は instantiation の関係にない。一般に e1 と e2 という2つの表現が instantiation の関係にあれば、e1, e2 いずれの表現を含む発話をおこなってもよい。その関係に、e1 と e2 のうちより正確な方を表現しなければならない。

(11)で4個食べたとき(3個でなく)「4個食べた」と言うのは、聞き手に推論の必要がないようにと聞き手の最小労力を考慮して Q-principle に従い、出きるだけ多く (contribution sufficient) を発話しているのではなく、4個が3個の instance でないことが主要因である。また(12)でブルドッグが来たのに「犬が来た」と言うのは、話し手が最小労力で済ませるために、「ブルドッグ」を「犬」に替えて少な目の内容 (contribution necessary) を発話しているのではない。「ブルドッグ」と「犬」が instance の関係にあるから (コンテキストの要請に応じて) 適切な選択をしているのである。そうであれば、少なくとも(11)(12)の発話については、話し手や聞き手の最小労力ということは無関係であり、最小労力に依存する Q/R-principles での説明は成立しないと行ってよい。

また、「ブルドッグと犬の関係」と「4個と3個の関係」は、一見情報量と数量の違いではないかと思わせるが、そうではなく、やはり根本は instantiation の関係の有無である。数量表現でも instantiation の関係にある場合がある。「ケーキ3個以上を(1分以内で)食べれば賞品がもらえるが、太郎はどうか」という状況では、4個食べれば賞品がもらえるから、「4個食べた」は「3個(以上)食べた」の instance である。この状況では「太郎は4個食べた」「太郎は3個食べた」のいずれの発話でもよい。(この場合もちろん、「3個食べた」は「4個食べなかった」を含意しない。つまり数量表現であっても、表現間に instantiation の関係があれば、scalar implicature は生じないということである。)

逆に、情報量に関する表現でも、instantiation の関係がなければ、適当な方を表現することはできない。*his finger* と *a finger*, *his leg* と *a leg*、はいずれのペアも情報量に関する表現であるが、*his finger* は *a finger* の instance であるが、*his leg* は *a leg* の instance でないため、次のような現象が生じる。

- (14) a. John broke a finger. (= his finger)  
 b. John broke a leg. (≠his leg)

つまり、「John は自分の指を折った」の場合は、*John broke his finger.* *John broke a finger.*のいずれの発話も可能であるが、「John は自分の脚を折った」の場合は、*John broke a leg.*の方は使えないということである。

親指 (thumb) を除いて指 (finger) が 8 本だとすると、8 本の中の一本は不特定の捉えられるから、指の所有者が特定されていても、その人の指を指すのに不特定表現 *a finger* が成立する。したがって、*his finger* と *a finger* は instantiation の関係にあることになる。しかし人の脚は 2 本しかないから、その所有者がわかっているならば、その一方の足を不特定の捉えにくい。そのため、所有者のわかっている脚は不特定表現 *a leg* では指せない、というわけである。これは *his leg* と *a leg* が instantiation の関係にはない、ということである。(鼻のように 1 個しかないものは不特定にはなれないから、*his nose* は *a nose* の instance ではない。だから *He broke his nose.* に代えて *He broke a nose.* と言えないことはもはや明白であろう。)

(14)の場合も Q/R-principle は無力で、これで説明しようとする、(14a)は R-principle による発話、(14b)は Q-principle による発話ということになるが、同じタイプの意味内容 (指や脚を折る) を表す同形式の表現に、なぜ異なる原則が適用されるのか、説明は不可能である。なぜ異なる原則が適用されるか説明できないということは、なぜ *a leg* の方だけが 'not his leg' という scalar implicature を生むのか、説明できないということである。(instantiation の関係があるときは R-principle が適用され、その関係が無いときは Q-principle が適用されるという改定案も考えられるが、そのとき話し手や聞き手にとっての最小労力とは無関係の、認知を基盤とする原則になっている。)

さて、RT は以上の現象にどう対処するのであろうか。Carston からの引用(15)によると、RT は scalar implicature についてほとんど論じなかったし、また RT では説明できないという主張まであったということであるが、これに対して Sperber & Wilson の主張するところは、presumption of optimal relevance の revised version(16)によって対処可能であるということのようである。

- (15) Many authors have noted that RT has had little to say about issue of scalar implicature; some have gone further and asserted that the theory is intrinsically incapable of accounting for this sort of inference (Levinson 1989: 466, Welker 1994: 80). If this were true, it would indeed be a shortcoming of the theory since this has been one of the central topics of post-Gricean inferential pragmatics. It has, if fact, been addressed,...most recently, by Sperber & Wilson(1995), who claim to be able to account quite smoothly for scalar implicature.

...it is useful...to see how the literal application of the new one[=(16)] extends the predictive power of the theory beyond that of the literal application of the earlier one. One area of pragmatics to which this extension applies is scalar implicature. (Carston 1998: 212)

- (16) Presumption of optimal relevance (revised) (Sperber & Wilson 1995: 270)
- a. The ostensive stimulus is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it.
  - b. The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences.

しかし(16)(a)(b)は、Carston (1998: Ch 5) の言を待つまでもなく、解釈する情報量の上限と下限を設定するもので、Q/R-principles に対応する。そうすると(11)(13)(14)にまつわる scalar implicature の問題は、RTにおいても依然、問題として残るということである。

### 2.3. 暗意の推論メカニズムの問題点：認知ドメイン（スクリプト）による解法

次の(17)は『語用論への招待』の中でもっとも興味深い例の1つである。この例を用いて説明しようとする暗意の推論メカニズムの破綻を、当のこの例自体が示唆しているようである。

(17) Speaker A: ベントレーは実に良い車です。どうです、一台お持ちになつては？

Speaker B: 私は高い車は買わないんです。 (今井 2001: 55) (cf. Harder 1996: 146)

Bがベントレーを買うつもりでないこと(暗意)を推論するメカニズムは次のようだとされる。すなわちまず、Bは「高い車は買わない」(前提1)と言っている。「ベントレーは高い車である」(前提2)ことはわかっている(それはBも知っている)。そうすると(前提の1と2から)、「Bに買う気はない」という結論になる。これが暗意解釈の推論メカニズムだとされる。

ところが自省してみると、この部分を読んでいた筆者(中村)はベントレーが高級車であることを知らなかった。知らないから前提2が欠落しているわけであるが、それでも、(17)のやり取りを目で追うだけでBにベントレーを買う気がないことは瞬時に察した。そのあと「ベントレーって高級車なのだ」と思うのだが、あえて言えば、結論から前提2を穴埋めしたことになる。

ベントレーが高級車だと知らない他の読者も、おそらく同じ推論経路を辿るのではないかとと思われる。これは、三段論法の推論を知っていても、この論法に沿って暗意解釈をしているわけではないということ、あるいは、われわれの暗意解釈の過程がこれとはまったく違ったものであろうということである。

次の問題は、「最小労力」の判断に関する問題である。(17)の「Bは買う気はない」という暗

意は「無駄な労力と時間をかけないで得られている」のであるが（上の(16a)を参照）、実は「無駄のない労力と時間をかけていない」ということがどのように判断されるのか、RTでは具体的に示されていない。

「無駄な労力と時間をかけない」ということが「一番最初に浮かぶ」ということであるなら、それは暗意の生じる現象をそのまま述べただけで、説明になっていない。

また「他の解釈と比べて」ということなら大変なことになる。無駄な労欲と時間のかかる、他のおそらく無限の数の解釈と比較するということになるから、無駄な労力と時間をかけて他の解釈を算出した上に、それら無限の数の解釈と比較するということで、無限以上の労力と時間がかかることになる。したがって、「無駄な労力と時間をかけない」ということは、「他の解釈と比べて」ということではない、ということになる。つまり、目当ての暗意に直に向かうような含意解釈ということになるが、そのメカニズムはわかっていない。それ故そのメカニズムが作動するのにどのくらいの労力がかかるかもわからないはずである。何もわかっていない「無駄な労力をかけない（で目当ての暗意に直に向かう）推論」を基に、relevance が規定されるのであれば、relevance の概念も直観以上のものではなく、空虚な概念だと言わねばならない。（プロの棋士に瞬時に浮かぶ次の一手が、瞬時に浮かぶから、relevant な一手だと言っているのと同じである。）

先の三段論法による推論方式は、実は無駄な労力と時間を要する推論の典型である。単純化して言えば、三段論法によって得られる結論が、十分なコンテキスト効果を上げているかどうか（適切な、最適の情報であるかどうか）をチェックするとき、あらゆる命題を三段論法にかけて暗意を算出し、そのコンテキスト効果をチェックすることになるから、無限の労力と時間がかかることになる。というわけで、「無駄な労力と時間をかけない」ということを条件とするなら、「三段論法による推論」は論理的に排除されるべきである。

（Relevance が出版され、暗意算出の記号操作性が提示されたのが 1986 年であるが、皮肉にもちょうどその年、ウィノグラードら（Winograd & Flores）が『コンピュータと認知を理解する』（産業図書）を著し、われわれの言語活動が記号の論理操作からほど遠いことを示した。ウィノグラードは、ことばの用いられるような日常世界では、明示的な命題群を通してでは、文脈すら理解されないことを示したのであった。）

認知言語学でも、いわゆる暗意算定の決め手があるわけではないが、その理論的立場から方向性のみを示すと、対象を適当な認知ドメインの上に位置付けるということが解釈の基本であるから、暗意の解釈でも、認知ドメインの一種であるフレーム、スクリプト、理想認知モデル、あるいはスキーマの自動的な想起ということになる（用語としてスキーマが多用されるが、認知文法のスキーマとの混同を避けるためにスクリプトを用いる）。「この車をどうです、一台」

という発話は、車の販売の場面を想起させ、さらに販売員は、客が車を買ってくれるかどうか最も関心があり、販売員と客とのやり取りがどのように進めば客との売買が成立するか（販売員は経験から知っている）、というような下位スクリプトも想起する。「高い車は買わない」というような発話が、売買の成立するディスコース（スクリプト）にありそうにないので、そのような発言をする客は車を買おうとしないと判断するというわけである。（メンタル・主pーすりろんからのアプローチについては、(5)の引用の③⑤参照。）

暗意解釈の瞬時性・直観性について、身体反応の反射性を考慮すれば、上のスクリプトには、スクリプト内の局面の流れだけでなく、それぞれの局面での身体感覚や情動・感情も組み込まれることになる。反射的に生じる身体感覚や情動・感情と連動して、一定のスクリプトがすばやく優先的に想起されるというわけである。「売らねば」という、いわば「身体的な」圧迫を受けて、販売員はいくつかのスクリプトを優先的に想起し、客の心を読み、次の行動をとるはずである。情動・身体性と、読みや判断の瞬時性との関連については、ダマシオ（Damasio, A.R.）の「ソーマティック・マーカー仮説」（『生存する脳』講談社）が示唆的である。

伝達意図を別にすれば、パース（Peirce, C. Sanders）の abduction やポパー（Popper, Karl）の conjecture も、暗意解釈（contextual effects, contextual implicature）と共通しているが、これもスクリプトと関連付けることができる。シャーロック・ホームズやコロンボ刑事など、死体を見て殺人と判断したときすでに犯人の目星をつけているところがある。この種の abduction や conjecture では（cf. Eco & Sebeok 1988）、「死人」から「殺人のスクリプト」が想起され、おそらく身体的直感から「殺人犯のスロット」にずっと犯人像が浮かびあがるのであろう。ホームズなどは事件解釈に推理の種明かしをすることがあるが、再読すればわかるように、それは論理的な推論などではなく、直観を論理的帰結であるかのように偽装しているにすぎない。あるテレビ・ドラマの母君は、ものがなくなると決まって「嫁（息子の妻）が盗った」と騒ぎ立てるのだが、これも abduction や conjecture であり、感情や情動が、スクリプトの呼び出しや認知・判断に対して強い影響力を持つことを窺わせる。（Wierzbicka(1998)は、その使役分析で、被使役者に行動を起こさせる要因として、感情や思考判断を考慮しており、単純な行為連鎖に基く分析を超えている。）

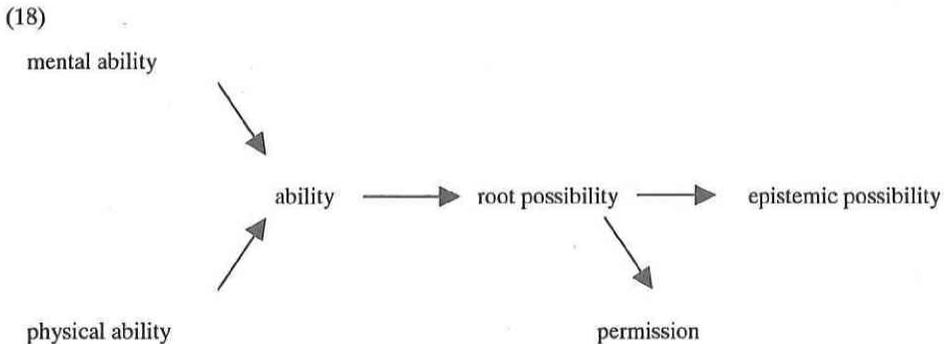
#### 2.4. 法助動詞分析の問題点：脱主体化による解法

Sweetser（1990）の法助動詞の分析は、その認識的用法が、根源的用法からのメタフォリカルな拡張であるとする点に特徴があるが、それら 2 用法の中間的用法が存在するために、その分析が問題となる。Bybee et al.(1994)の指摘するように、メタフォリカルな拡張は 2 つの異質のドメインをいわば跨ぐ拡張であるから、中間的用法は存在しないはずである。そうであれば、認

識的用法と根源的用法との中間的用法が存在する助動詞の意味発達はメタフォリカルな拡張ではない、ということになる。

これに対して RT に基く Papafragou(1998)の法助動詞の意味論は、命題領域 (D) と命題 (p) との関係(R)、と分析される。個々の場面における具体的な読み (例えば *can* の能力や可能性の読み) は、当該コンテキストの特殊な命題領域に応じて「推論」される。こうして、法助動詞の用法の微妙な連続性が捉えられ (また用法の不確定性が強調され)、法助動詞の意味は従来のようにいくつかの用法に特定する必要はなく、先の「D と p の何らかの関係」という一般的な規定で十分だ、というわけである。

この分析の問題点は、多くの言語に見られる用法間の発達関係が捉えられない点にある。具体的には、以下に示されるような、英語の *can* に相当する法助動詞の通言語的な意味発達 (Bybee et al 1994: 194, 199)が捉えられない。



Papafragou の分析は、色で言えば、われわれは色を認識することができ、どのような色を認識するかは個々の場面で決まる、と言っているだけで、われわれが共通して認識する焦点色 (例えば 7 色) があることを無視しているし、通言語的に観察される色彩語間の優先性も無視している、に等しいのである。

例えば、physical ability > ability > root possibility への発達は、それぞれの意味を以下のように表示すると明らかなように、各意味が徐々に一般化しており、意味の一般化 (generalization) として捉えることができる (cf. Bybee et al 1994: 192, Achard 1996)。

(19) *Can* predicates that

- (i) physical enabling conditions exist in the agent
- (ii) enabling conditions exist in the agent (ability)
- (iii) enabling conditions exist (root possibility)

for the completion of the main predicate situation.

(14)で(ii)の意味記述では、(i)の physical が落ちているし、(iii)ではさらに in the agent が落ちている。

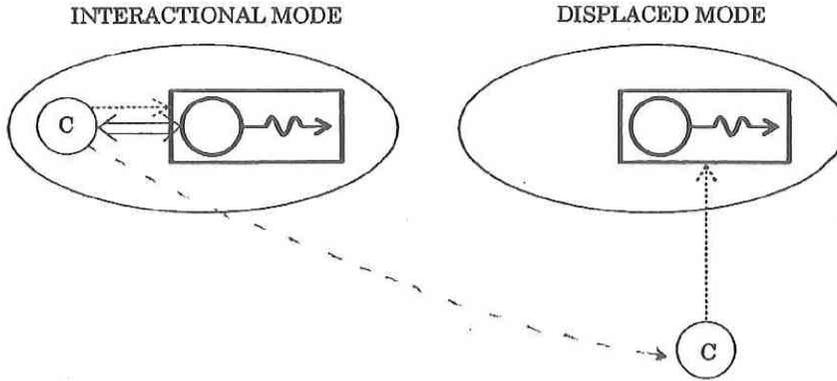
root possibility からさらに epistemic possibility と permission への拡張は、Bybee らは inference としているが、generalization や inference に代わる（あるいはそのような意味変化を支えている）認知的なメカニズムとして、脱主体化（desubjectification）を提案することができる（Nakamura 2001）。（permission への拡張については、許可のスキプトの一部（能力の存在）を表現して、相手に許可を推測させる立場、すなわち基本的には、部分から全体を知るメトニミー認識によるとする立場である。）

認知主体と対象がインタラクトしながら、対象を捉える認知様態を interactional mode of cognition と呼び、いわば外から対象を捉える認知様態を displaced mode of cognition と呼ぶとすると、前者から後者への認知様態の移行が、脱主体化（desubjectification）である。displaced mode は、認知主体と客体が対峙している主客分離のデカルト的世界理解に代表されるが、interactional mode は、現象学や日本の西田哲学（純粹経験）の主客合一の立場であり、物理学で量子論が到達した世界認識でもある。（いわゆる科学的客観的探求が最終的に行き詰まるのは、観察者である認知主体と外界とのインタラクションを通して立ち現われる世界を、あたかも自律的で客観的な世界と誤解しているためである。）繰り返し指摘される西洋と日本の世界認識の対立も、interactional と displaced の対立として整理される。生態学的やアフォーダンスも interactional mode である。言語学では、Langacker (1985, 1990, 1991) の on-stage, off-stage、Kuroda(1973)の reportive, non-reportive、Chafe (1996) の immediate vs. displaced model などが認知様態の対立を表している。用語として、on-stage は主体と対象とのインタラクションを表さないし、アフォーダンスには、intersubjective な側面つまり相手の心を読むという側面が落ちるので、そのような側面まで含めて interactional mode という用語を用いる。

脱主体化（desubjectification）という用語は、ピアジェの認知発達における「脱中心化」を連想させるが、脱主体化には、ナイーブな認識から成人の認識へというような含みはなく、文字通り身体的なインタラクションを通しての本来的な認識から、対象を認知主体から切り離し、対象（物事）を自律的な客体として捉える、いわば仮想の認識様態への移行である。

脱主体化の過程は図示すると下のよう、左の図の二番目の円（例えばリンゴ）とインタラクトする認知主体 C（Conceptualizer, 左端の円）が、インタラクションの場（on-stage）から身を引いて、右の図のように、あたかも外（off-stage）から観察しているように仮想する過程である。

(20) de-subjectification (from interactional to displaced mode of cognition)



「られる」や *can, able* の ability の用法から epistemic の用法への拡張には、まさに脱主体化が働いていると言える。

- (21) a. ぼくはこのリンゴを3分でたべられる。 (interactional mode)  
 b. このリンゴは3分でたべられる。 (displaced mode)
- (22) a. I can eat this apple in 3 minutes. (interactional mode)  
 b. This apple can be eaten in 3 minutes. (displaced mode)
- (23) a. I'm able to wash/solve/drink/read it. (interactional mode)  
 b. This is washable/solvable/drinkable/readable. (Horn 1980) (displaced mode)

(21)~(23)の(a)で例えば「ぼくはこのリンゴを3分でたべられる」というのは、リンゴを前にしての身体感覚であり、interactional mode による認識であるが、(b)文の「このリンゴは3分でたべられる」というのは、リンゴと距離をとって、それがあたかもそのリンゴに固有の特性であるかのように捉える displaced mode の認識を反映している。

Sweetser(1990)のメタフォリカルな拡張としての分析も、ability から possibility への拡張の説明にてこずっているが、その拡張にはドメインを跨ぐメタファー認識が関与しているのではなく、脱主体化のような認知プロセスが関与しているためである。また、脱主体化の途中の段階では、ability と possibility のどちらともつかない中間的用法が考えられるから、脱主体化分析では、不確定的で中間的な用法が存在するのは当然で、問題とならない。中間的用法の存在は、メタフォリカルな拡張とする分析を放棄させるが、脱主体化による分析を支持することになる。

Papafragou (1998) の分析は、法助動詞が root と epistemic の2種類の用法を持ち、しかも前

者から後者へ意味拡張するという通言語的な傾向を、説明できないが、脱主体化を想定する分析では、interactional mode が root の用法に、displaced mode が epistemic の用法に対応するから、この傾向は当然ということになる。

### 3. 結び

RTの個々の問題点について論じてきたが、relevance を記号演算系の推論のみと結び付けようとする点にRTの決定的な問題があると思われる。pならばqで、pがrなら、rはqであるというような推論に注目するあまり、例えば「ソクラテスは死ぬ」という具体的な命題そのものがどのような意味構造をしているかということに対して十分な取り組みがなされていない。その辺を処理するために、最初から位置付けの明確でない概念(LFや明意など)がひとり歩きし、混乱を増長することになっている。記号的演算とそれに要するエネルギーや時間は直結しているから、労力や時間でrelevantな解釈が規定されることになる。この規定は、人間の解釈過程が多くの場合瞬時的であるという印象と合致して、あたかも人間のrelevantな解釈のプロセスを捉えているようであるが、実のところは、人間の解釈のメカニズムそのものについては何も明らかにしないし、それを明らかにする方向に向かうものでもない(時間も労力も解釈のプロセスを制約する要因ではあるが、解釈のプロセスそのものではない)。

もしRTが、人間の解釈メカニズムを記号演算系であるとする作業仮説で、人間のさまざまな解釈現象がどの程度説明できるかということであり、現象のすべてが説明できれば人間の解釈のプロセスは記号演算系だということにもなるが、(本論で議論した問題点が妥当なものであれば)説明可能な現象も少なく、作業仮説に問題があるということになる。

### 参考文献

- Achard, M. 1996. "French Modals and Speaker Control." *Conceptual Structure, Discourse and Language*, ed. by A.E. Goldberg, 1-15. Stanford: CSLI.
- 秋元 実治 (編) 2000. 『文化化—研究と課題—』 東京: 英潮社.
- Baghramian, M. 1998. *Modern Philosophy of Language*. London: J.M. Dent.
- Blakemore, D. 2000. "The Distinction between Conceptual and Procedural Meaning." *Keio Studies in Theoretical Linguistics* 2. 1-18.
- Bybee, J., Perkins, R., and W. Pagliuca. 1994. *The Evolution of Language*. University of Chicago Press.
- Chafe, W. 1996. "How Consciousness Shapes Language." *Pragmatics and Cognition* 4. 35-54.
- Carston, R. 1998. "Informativeness, Relevance and Scalar Implicature." *Relevance Theory: Applications and implications*, eds. by R. Carston and S. Uchida, 179-236. Amsterdam: John Benjamins.
- Dixon, R.M.W. 1991. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford: Oxford

- University Press.
- Eco, U. and T.A. Sebeok. 1988. *The Sign of Three*. Indiana University Press.
- Fauconnier, G. 1999. "Methods and Generalization." *Cognitive Linguistics: Foundations, Scope, and Methodology*, ed. by T. Janssen and G. Redeker, 95-127. Berlin/New York: Mouton.
- Fischer, K. 2000. *From Cognitive Semantics to Lexical Pragmatics*. Berlin/New York: Mouton.
- Gaerdenfors, P. 1998. "Some Tenets of Cognitive Semantics." *Cognitive Semantics*, ed. by J. Allwood and P. Gaerdenfors, 19-36. Amsterdam: John Benjamins.
- Harder, P. 1996. *Functional Semantics*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Horn, L. 1980. "Affixation and the Unaccusative Hypothesis." *CLS* 7: 134-146.
- Horn, L. 1984. "Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-based and R-based implicature." *Meaning, Form, and Use in Context*, ed. by D. Schiffrin, 11-42. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- 池上 嘉彦. 2000. 『「日本語論」への招待』. 東京: 講談社.
- 今井 邦彦. 2001. 『語用論への招待』. 東京: 大修館書店.
- Kuroda, S. 1973. "Where Epistemology, Style, and Grammar Meet." *A Festschrift for Morris Halle*, ed. by S.R. Anderson and P. Kiparsky, 377- 91. New York: Holt.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. *Philosophy in the Flesh*. Basic Books.
- Langacker, R. 1985. "Observations and Speculations on Subjectivity." *Iconicity in Syntax*, ed. by J. Haiman, 109-50. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. 1987/91. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. I & II. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. 1997. "Consciousness, Construal, and Subjectivity." *Language Structure, Discourse and the Access to Consciousness*, ed. by Masim I. Stamenov, 49-75. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. 1999. "Assessing the Cognitive Linguistic Enterprise." *Cognitive Linguistics: Foundations, Scope, and Methodology*, ed. by T. Janssen and G. Redeker, 13-59. Berlin/New York: Mouton.
- Marmaridou, S. S.A. 2000. *Pragmatic Meaning and Cognition*. Amsterdam: John Benjamins.
- 正高 信男. 2002. 「ウィリアムズ症候群に特徴的な認知と言語」月刊『言語』6月号. 30-37.
- 中村 芳久. 1989. 「メタ言語的 if 節」『英語学の視点』 159-81, 九州大学出版会.
- 中村 芳久. 1993. 「Neo-Pragmatics: Beyond Neo-Gricean Pragmatics—語用論の問題・ 認知意味論による解法—」『金沢大学文学部論集』(文学科篇) 第 13 号. 77-107.
- 中村 芳久. 2000. 「「勝ち」は「負け」—トートロジーに潜む認知的否定」月刊『言語』11月号. 71-76.

中村芳久

- Nakamura, Y. 2001. "Desubjectification as a Backstage Cognition Reflected in Various Linguistic Constructions." ms. Kanazawa University.
- 中村 芳久. 2001. 「二重目的語構文の認知構造—構文内ネットワークと構文間ネットワークの症例—」 山梨正明 (他編) 『認知言語学論考』 第1巻, 59-110. 東京: ひつじ書房.
- Nicole, S. 1998. "A Relevance Theory Perspective on Grammaticalization." *Cognitive Linguistics* 9, 1-35.
- Papafragou, A. 1995. "Metonymy and Relevance." *UCL Working Papers in Linguistics* 7. 141-75. (Revised as Papafragou, A. 1996. "On Metonymy." *Lingua* 99. 169-95.)
- Papafragou, A. 1998. "Inference and Word Meaning: The Case of Modal Auxiliaries." *Lingua* 105. 1-47.
- Putnam, H. 1975. *Mind, Language, and Reality: Philosophical Papers* Vol. 2. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thornburg, L. and K-U. Panther. 1997. "Speech Act Metonymy." *Discourse and Perspective in Cognitive Linguistics*, ed. by W.A. Liebert, G. Redeker, and L. Waugh. Amsterdam: John Benjamins.
- Tomlin, R. 1997. "Mapping Conceptual Representations into Linguistic Representations: The Role of Attention in Grammar." *Language and Conceptualization*, ed. by Jan Nuys and Eric Pederson, 162-89. Cambridge: Cambridge University Press.
- Verstraete, J-C. 2001. "Subjective and Objective Modality: Interpersonal and Ideational Function in the English Modal Auxiliary System." *Journal of Pragmatics*. 33. 1505-28.
- Wierzbicka, A. 1998. "The semantics of Causative Constructions in a Universal-Typological Perspective," *The New Psychology of Language*, ed. by M. Tomasello, 113-53. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- 山梨 正明. 2000a. 「関連性理論のアプローチの批判的検討」 『英語青年』 10月号. 427-30.
- 山梨 正明. 2000b. 「認知言語学からみた関連性理論」 『学習院大学言語共同研究所紀要』 第24号. 148-56.